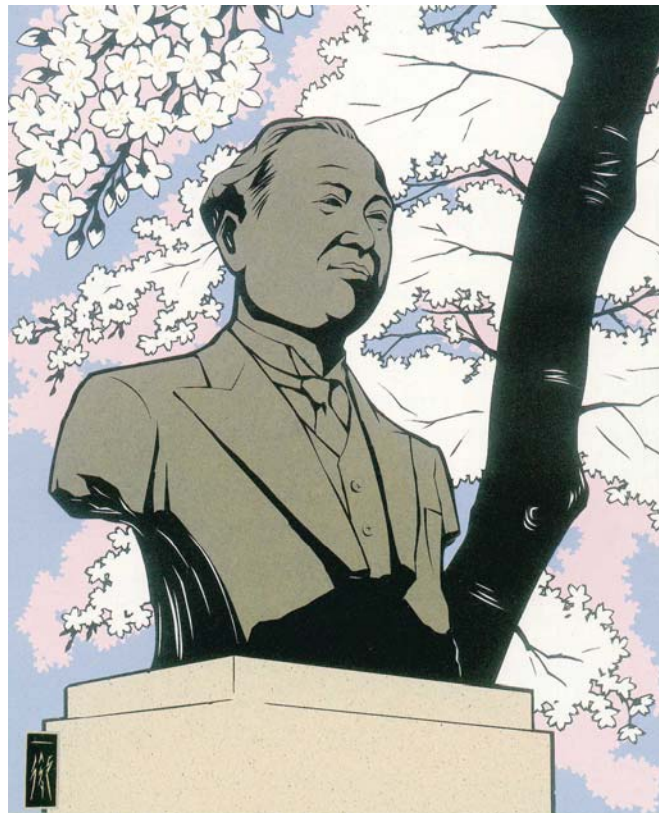


2003年度
日本経済史研究所報
第7号

1. 研 究 活 動
2. 出 版 活 動
3. 広 報 ・ 交 流 活 動
4. 資 史 料 の 収 集
5. 開 催 会 議
6. 人 事
7. 施 設
8. 2004 年 度 行 事 予 定
9. 日本経済史研究所規程



成田一徹（本学OB）作

2004 年 8 月

大阪経済大学日本経済史研究所

黒正巖遺墨・遺品展に向けて

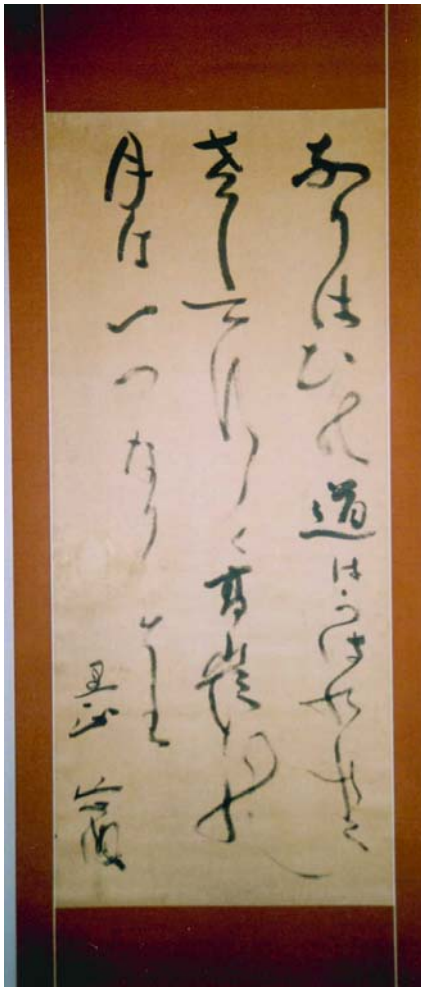
昨年、研究所の開所70周年を無事に終え、一区切りがつけました。泉下の御霊をはじめ、多くの方々のご支援の賜物と感謝するばかりです。

さて、本年の秋（11月7日～29日）には黒正巖博士の遺墨・遺品を集め、A館ギャラリーにおいて展覧会を企画しております。研究所の入り口に、若干展示しておりますが、まことに不十分です。黒正博士の遺志を80周年に向けて再考するため、蒐集しようと取り組み始めました。5月には、故郷の岡山に、黒正夫妻の墓参りと調査に行ってきました。本多三郎、山本正所員とご子息の黒正清・明兄弟がご一緒でした。雨の中、宝泉寺に詣で、お墓にビールを供えて、展覧会の成功をお祈りしてきました。

調査では、大正12年の欧州留学の折の「留学ノート」を発見し、黒正研究に生涯をかけてこられた藤原大八氏（昭和高校卒）より、黒正巖から師の本庄栄治郎宛の手紙を軸装したものを借用することができました。

これまでの調査で、宮本又郎大阪大学大学院教授より黒正筆の掛軸を寄贈して頂き、秀村選三九州大学名誉教授より黒正筆の色紙を借用できることになりました。その他、これまでに大学に寄贈されたものの所在確認をし、研究所の温度管理の行き届いた古文書室で保管しています。

こうした中で、痛感しますのは、「あと10年早ければ・・・」です。これはと思う関係者の方に連絡をつけても、亡くなっておられたり、すでに処分したり行方不明との答えがほとんどです。愚痴っでもはじまりません。「思い立ったが100年目・・・」。何とか成功させたいと思います。



左の写真は、黒正博士が襖に書いたもので、此度新たに表装しました。まさに、今の経大に求められている一筋の志です。

甲申大暑

日本経済史研究所所長 徳永 光俊

なりはひの道はかはれと
さして行く高嶺の
月は一つなりけり

黒正巖

2003年度の活動経過

1. 研 究 活 動

■ 経済史研究会（第1土曜日開催、いずれも大阪経済大学にて）

- 第32回 2003年4月5日 出席者17名
報告 江藤 彰彦 久留米大学経済学部教授
「近世前期のフロンティア状況と開発限界—『勤勉革命』前史—」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏
- 第33回 2003年6月7日 出席者23名
報告 大島 真理夫 大阪市立大学大学院経済学研究科教授
「希少生産要素による経済史の段階区分
—サプライ・サイドからの経済史再考—」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏
- 第34回 2003年10月4日 出席者20名
講演 宮本 又郎 大阪大学大学院経済学研究科教授
「日本のコーポレート・ガバナンス：その歴史的成り立ち」
司会 本学経済学部助教授 吉田 秀明 氏
- 第35回 2003年12月6日 出席者21名
書評 石井 寛治 東京経済大学経営学部教授
藤田貞一郎著『近代日本経済史研究の新視角
—国益思想・市場・同業組合・ロビンソン漂流記—』
(清文堂出版 2003年7月刊)
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏

■ 日本経世済民史研究会（いずれも大阪経済大学にて）

- 第1回 2003年11月21日 出席者16名
報告 原田 津 氏(農事評論家)
「日本社会の基本原理」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏
- 第2回 2004年1月24日 出席者19名
報告 渡邊 勝之 明治鍼灸大学鍼灸学部講師
「東洋医学の源流
—東洋医学原論の構築に向けて—」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏
- 第3回 2004年3月12日 出席者15名
報告 上久保 敏 大阪工業大学知的財産学部助教授
「戦前の『日本経済学』—その系譜と学問状況—」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏



報告は原田津氏（第1回）

■ 日本経済史研究所開所 70 周年記念行事

◇ 記念講演会（第 1 回春季歴史講演会）

2003 年 5 月 17 日 出席者 480 名

於：本学 A 館フレアホール

講師：津本 陽 氏（作家）

「歴史小説に見る経世済民」

〔尺八演奏 ウーベ・ワルター氏（ドイツ）〕



◇ 記念祝賀会

2003 年 5 月 17 日 出席者 85 名

於：本学 50 周年記念館 7 階同窓会ホール

◇ 成田一徹（本学 O B）切り絵展

2003 年 5 月 8 日～22 日

於：本学 A 館ギャラリー

阪急上新庄駅「ギャラリー関銀」



■ 3 大学学術交流記念 第 5 回 寺子屋「史料が語る経済史」

於：大阪経済大学 フレアホール

2003 年 7 月 5 日 師匠：大阪経済大学日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏

「黒正巖と『経世済民』史学」

出席者 187 名

2003 年 7 月 19 日 師匠：松山大学大学院経済学研究科科長

岩橋 勝 氏

「日本における経済社会の成立」

出席者 203 名

2003 年 7 月 26 日 師匠：東京経済大学学長

村上 勝彦 氏

「東アジアにおける日本経済史」

出席者 207 名

■ 黒正塾 第 1 回秋季学術講演会

〔オープン・リサーチ・センター採択記念〕

於：大阪経済大学 フレアホール

2003 年 11 月 15 日

出席者 330 名

講師：元大蔵事務次官 長岡 實 氏

「戦後経済史に見る経世済民」

2003 年 11 月 22 日

出席者 250 名

講師：大阪大学大学院教授 宮本 又郎 氏

「大阪の企業家精神と経世済民」

■ 国際版経済史文献解題作成のための国際研究交流

2004 年 3 月 18～20 日 ソウルにて

成均館大学 東亜学院 宮嶋博史教授と研究交流。

研究所より、徳永光俊所長、本多三郎所員が参加。

通訳として、朴泰勲本学経営学部講師が同行。



■研究助成の申請

- 学術振興野村基金 【採択】
研究課題 「日本「経世済民」史学の源流としての黒正巖・「日本歴史学派」の基礎的研究」
- 平成 16 年度学術研究振興基金 <日本私立学校振興・共済事業団>
研究課題 「日本経世済民史学構築のための基礎的研究」
- 平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(B) <日本学術振興会>
研究課題 「日本経世済民史学構築のための「経済史・経営史類語集(シソーラス)」作成」
- 平成 16 年度科学研究費補助金データベース公開促進費 <日本学術振興会>
研究課題 「経済史文献解題データベース」
- 平成 16 年度「21 世紀 C O E プログラム」 <文部科学省>
プログラム 「21 世紀「経世済民」社会モデルの比較研究—日本の歴史的経験の総括—」

2. 出 版 活 動

- | | | |
|-------------------------------------|--------------|----------|
| (1) 『経済史文献解題』 2002(平成 14)年版 (思文閣出版) | 2003 年 12 月刊 | 11,800 円 |
| (2) 『経済史研究』 第 8 号 | 2004 年 3 月刊 | 2,000 円 |

講 演

戦前日本の金融システムと銀行淘汰	岡崎 哲二
岡崎哲二教授の講演に対するコメント	鹿野 嘉昭

論 考

近世社会経済史から見た「仕掛」について	桜井 信哉
明治大正期京都の商家集団の銀行関与活動とリスク管理 —京都貯蔵銀行・京都銀行を事例として—	小川 功
昭和初期における大蔵省銀行検査体制の強化とその実態 —地方銀行を中心に—	白鳥 圭志
「集権的分散システム」はいつ形成されたか —「集中—分散」の側面を中心に—	梅原 英治
金融システムの再編とその影響 —20 世紀末の日本と 19 世紀末のイギリス—	寺地 孝之
数の文化史	西山 豊

書 評

藤田貞一郎著『近代日本経済史の新視角 —国益思想・市場・同業組合・ロビンソン漂流記—』	石井 寛治
石井寛治教授による書評へのリプライ	藤田貞一郎
山本有造著『「満洲国」経済史研究』	安富 歩

歴史随想

歴史における連続と断絶—ヴィシー政権の共和制的起源—	山本 有造
----------------------------	-------

- | | |
|--|----------|
| (3) 徳永光俊・本多三郎共編『経済史再考』(日本経済史研究所開所 70 周年記念論文集)
大阪経済大学日本経済史研究所発行
思文閣出版制作発売 2003 年 5 月刊 | 12,000 円 |
| (4) 史料叢書第 7 冊
渡辺忠司・徳永光俊共編
『飛脚問屋井野口屋記録』第 4 巻
思文閣出版発行 2004 年 3 月刊 | 11,800 円 |
| (5) 所蔵古文書目録第 4 集
渡邊忠司編『河内国讃良郡岡山村文書目録』
大阪経済大学日本経済史研究所発行
2004 年 3 月刊 | 非売品 |
| (6) 大阪経済大学日本経済史研究所外部評価委員会編集
『大阪経済大学日本経済史研究所外部評価報告書』
2003 年 8 月 | 非売品 |



3. 広 報 ・ 交 流 活 動

(1) 新聞・雑誌掲載記事

■『飛脚問屋井野口屋記録』に関して

- ①2003. 7. 19 日経新聞(朝) 『飛脚問屋井野口屋記録』の翻刻
②2004. 2. 3 日経新聞(夕) 飛脚問屋の経営術を探る

■経済史研究会・寺子屋などに関して

- ③2003. 4. 24 毎日新聞(夕) 大阪経済大日本経済史研究所講演会
④2003. 5. 8 朝日新聞(夕) 大阪経済大学記念講演会
⑤2003. 5. 22 毎日新聞(夕) 第33回経済史研究会
⑥2003. 6. 19 毎日新聞(夕) 寺子屋「史料が語る経済史」
⑦2003. 7. 5 日経新聞(朝) 寺子屋「史料が語る経済史」
⑧2003. 9. 16 読売新聞(夕) 第34回経済史研究会
⑨2003. 9. 25 毎日新聞(夕) 第34回経済史研究会
⑩2003. 10. 25 産経新聞(夕) 「黒正塾」秋季学術講演会
⑪2003. 10. 27 読売新聞(朝) 「黒正塾」秋季学術講演会
⑫2003. 10. 29 毎日新聞(夕) 「黒正塾」秋季学術講演会
⑬2003. 11. 2 産経新聞(朝) 「黒正塾」秋季学術講演会
⑭2003. 11. 6 朝日新聞(夕) 「黒正塾」秋季学術講演会
⑮2003. 12. 9 読売新聞(夕) 「日本経世済民史研究会」発足
⑯2004. 1. 15 毎日新聞(夕) 第2回日本経世済民史研究会
⑰2004. 1. 16 朝日新聞(夕) 第2回日本経世済民史研究会
⑱2004. 3. 11 毎日新聞(夕) 第3回日本経世済民史研究会
⑲2004. 3. 16 読売新聞(夕) 第36回経済史研究会
⑳2004. 3. 30 日経新聞(夕) 第36回経済史研究会

(2) 「大阪経済大学日本経済史研究所開所70周年記念」冊子(2003年5月17日)

(3) 「日本経済史研究所報」第6号(2003年9月)

(4) ホームページ <http://www.osaka-ue.ac.jp/nikkeisi/>

4. 資 料 の 収 集

◆購入資料

◇図書	資産性図書	526冊	4,214,821円
	消耗性図書	65冊	195,841円
◇雑誌(18種)		167冊	154,140円
	合計	758冊	4,564,802円

◆受贈資料

◇図書	100冊
◇雑誌(63種)	85冊

研究所が所蔵している資史料については、整理・保存のうえ、史料叢書『飛脚問屋井野口屋記録』(全4冊)や史料目録(既刊4冊)として、翻刻・刊行しています。

5. 開 催 会 議

◇第1回運営委員会所員会議

日 時 2003年5月13日(火) 12:00~12:50
場 所 日本経済史研究所共同研究室
議 題 (1) 70周年記念事業について

- (2) 2003 年度事業活動について
- (3) オープン・リサーチ・センターについて
- (4) その他

◇第2回運営委員会所員会議

- 日 時 2003 年 7 月 4 日(金) 11:00~12:30
- 場 所 日本経済史研究所共同研究室
- 議 題 (1) オープン・リサーチ・センターについて
(2) 外部評価委員会について
(3) 開所 70 周年行事について
(4) その他



◇第3回運営委員会所員会議

- 日 時 2003 年 10 月 3 日(金) 11:00~12:30
- 場 所 日本経済史研究所共同研究室
- 議 題 (1) 外部評価の結果について
(2) 『経済史文献解題』のデータベース化について
(3) 2003 年度後期の活動について
(4) 2004 年度予算について
(5) その他

◇第4回運営委員会所員会議

- 日 時 2003 年 12 月 12 日(金) 11:00~13:00
- 場 所 日本経済史研究所共同研究室
- 議 題 (1) 9~11 月の活動結果について
(2) 2004 年度予算の復活折衝について
(3) 理事会・連絡協議会への要望書について
(4) 次回COE(2004. 3)の申請準備について
(5) その他

◆第2回外部評価委員会

- 日 時 2003 年 5 月 18 日(日) 14:00~17:00
- 場 所 日本経済史研究所共同研究室
- 出席者 岩橋 勝 松山大学大学院経済学研究科科長
石上 英一 東京大学史料編纂所所長
大島真理夫 大阪市立大学大学院経済学研究科教授
堺 憲一 東京経済大学学長補佐
谷口 明丈 東北大学大学院経済学研究科教授
徳永 光俊 日本経済史研究所所長
本多 三郎 日本経済史研究所所員

◆外部評価委員による外部評価

- ・日本ベンチャーキャピタル株式会社
- 代表取締役会長 文箭 安雄 氏

(1 日目)

日 時 2003 年 6 月 23 日(月) 17:00~17:45

場 所 日本経済史研究所所長室

(2 日目)

日 時 2003 年 6 月 25 日(水) 10:00~10:45

場 所 日本ベンチャーキャピタル株式会社
 ・松下電器産業株式会社
 取締役社長 中村 邦夫 氏
 (経営企画グループ：石井 純・内田 貴之 氏)
 日 時 2003 年 6 月 25 日 (水) 15:30～16:20
 場 所 松下電器産業株式会社
 ・日本経済新聞社常務取締役
 大阪本社代表 平田 保雄 氏
 日 時 2003 年 7 月 2 日 (水) 11:00～11:50
 場 所 日本経済新聞大阪本社

6. 人 事 (2003 年 4 月 1 日付)

所 長	徳永 光俊 (経済学部)		
運 営 委 員	吉田 秀明 (経済学部)	青水 司 (経営学部)	
	伊藤 幸雄 (経営情報学部)	近藤 直美 (人間科学部)	
	寺倉 寛 (研究所事務室)		
所 員	本多 三郎 (経済学部)	大橋 範雄 (経済学部)	
	藤本 高志 (経済学部)	吉田 秀明 (経済学部)	
	西山 豊 (経営情報学部)	家近 良樹 (人間科学部)	
	楠葉 隆徳 (人間科学部)	山本 正 (人間科学部)	
特別研究所員	秀村 選三 九州大学名誉教授	作道洋太郎 大阪大学名誉教授	
	原田 敏丸 大阪大学名誉教授	安岡 重明 同志社大学名誉教授	
	藤本 隆士 福岡大学名誉教授	竹岡 敬温 大阪大学名誉教授	
	松下 志朗 九州大学名誉教授	藤田貞一郎 同志社大学商学部教授	
	宮本 又郎 大阪大学大学院経済学研究科教授		
	荻野 喜弘 九州大学大学院経済学研究科教授		
	佐村 明知 大阪大学大学院経済学研究科教授		
	野田 公夫 京都大学大学院農学研究科教授		
	今野 孝 福岡大学商学部教授		
	山田 達夫 大阪経済大学名誉教授		
	松村 幸一 大阪経済大学名誉教授		
	渡邊 忠司 大阪市史編纂所主任研究員		
研究協力員	岡本 幸雄 西南学院大学名誉教授		
	山本 有造 京都大学人文科学研究所教授		
	喜舎場一隆 第一福祉大学人間社会福祉学部教授		
	東定 宣昌 九州大学石炭研究資料センター教授		
	水原 正亨 大阪学院大学経済学部教授		
	三上 敦史 大阪学院大学国際学部教授		
	下谷 政弘 京都大学大学院経済学研究科教授		
	瀬岡 誠 大阪学院大学国際学部教授		
	石川健次郎 同志社大学商学部教授		
	杉原 薫 大阪大学大学院経済学研究科教授		
	西村 卓 同志社大学経済学部教授		
	上村 雅洋 和歌山大学経済学部教授		
	宇佐美英機 滋賀大学経済学部教授		
	阿部 武司 大阪大学大学院経済学研究科教授		
	江藤 彰彦 久留米大学経済学部教授		
	澤井 実 大阪大学大学院経済学研究科教授		

	山田 秀	九州産業大学商学部助教授
	足立 芳宏	京都大学大学院農学研究科助教授
	原 康記	九州産業大学商学部助教授
	宮崎 克則	九州大学総合研究博物館助教授
	武井 章弘	大阪学院大学経済学部助教授
	鳩澤 歩	大阪大学大学院経済学研究科助教授
	松村 隆	大阪学院大学国際学部助教授
	木山 実	関西学院大学商学部専任講師
	楠本美智子	九州大学九州文化史研究所助手
	新鞍 拓生	九州大学石炭研究資料センター助手
	山口 信枝	福岡県地域史研究所研究員
	藤本 俊史	福岡大学研究推進部大学史資料室
	後藤 正明	福岡大学研究推進部大学史資料室
	植田 知子	京都学園大学非常勤講師
	中島 裕喜	近畿大学非常勤講師
	蕭 文嫻	大阪経済大学非常勤講師
	豊田 太郎	大阪経済大学非常勤講師
	伊藤 淳史	京都大学大学院農学研究科
	福岡 正章	京都大学大学院経済学研究科
	上野山 学	同志社大学大学院経済学研究科
	諸原 真樹	福岡大学大学院商学研究科
	奥田 以在	同志社大学大学院経済学研究科
	酒井 朋子	京都大学大学院農学研究科
	二宮 美鈴	大阪経済大学日本経済史研究所
『経済史研究』	石川健次郎	(同志社大学)
編 集 委 員	江藤 彰彦	(久留米大学)
	柴 孝夫	(京都産業大学)
	水原 正亨	(大阪学院大学)
事 務 室	寺倉 寛・法貴 義弘	
	松村 桂子・小澤 知子・平野 早苗	

所員の動向

●本多 三郎

19世紀後半のアイランド土地闘争、就中、1870年代末から80年代初めにかけて未曾有の規模で展開されたアイランド土地戦争と、その背景にあった、「世界の工場」イギリス資本主義の再生産構造の一環に組み込まれつつあったアイランドの農業土地問題・移民問題を研究している。現在、中間報告『アイランド土地問題―大英帝国の陰』（仮題）をまとめるために、2004年7月から9月にかけて3ヶ月間、アイランド現地での調査研究を行う。

●家近 良樹

去年の5月から、前々から執筆依頼のあった徳川慶喜に関して原稿を書き進める作業に従事しております。その結果、今年（2004年）の9月に『徳川慶喜』（吉川弘文館）を出版する運びになりました。ただ、この書物が対象としているのは、幕末期の慶喜です。つまり、明治期の慶喜についてはスッポリと抜け落ちる形となりました。が、別の出版社から、この期の慶喜については是非書いて欲しいとの要望があり、熟慮した結果、引き受けることにしました。そこで、いま『徳川慶喜（家）の明治』という仮題のもと、楽しみながら執筆しております。楽しみながらと書くと不謹慎かもしれませんが、明治期の慶喜は全くもって重要人

物などではなく、そこにかえって妙味があります。いずれ、そう遠くない時期に読んでいただけるのではと考えております。

●山本 正

イギリス諸島の三王国と大西洋の彼方の西インド諸島および北アメリカ大陸における諸植民地で形成されることになる帝國的政治体（政治システム）として近世イギリス大西洋帝国を捉えたうえで、これを構成する王国／植民地のアイルランドが、この政治体（システム）のなかでいかなるポジションを占めたかという問題関心のもと、近世アイルランド史にアプローチしています。2年前には研究所から助成金をいただいて『王国と植民地—近世イギリス帝国のなかのアイルランド』を上梓しましたが、そこでは、一応近世全体をカバーしたものの、16世紀のテューダー朝期を扱った部分に比べ、17世紀以降が内容的に薄くなったきらいがありました。そこで、もっかのところは、17世紀半ばのイギリス諸島における動乱—かつてはもっぱら、イングランド中心主義史観の濃厚な「ピューリタン革命」という用語で呼ばれていたが、近年は「三王国戦争」という用語が定着しつつある—に焦点を定めつつ、上記の問題関心にもとづく具体的な研究課題が設定できないものかと、あれこれ考えているところです。

●西山 豊

経済と歴史をキーワードにする当研究所の所員として数学が専攻の私が存在しつづけることができるかずいぶん悩んだが、やっとそれらしい研究テーマが見つかりそれをまとめた。「数の文化史」というもので『経済史研究』第8号に掲載されている。日本や東洋では日常生活の中で七五三など奇数がよく使われるが、西洋では二や四など偶数がよく使われる。その背景には奇数の文化と偶数の文化、さらには奇数信仰と偶数信仰があるのではというもの。虹の七色と六色、五芒星と六芒星の世界観の違いを説明し、二千年札はなぜ定着しなかったのか、日本に二大政党制は無理なのではなどを考察してみた。興味のある方はご覧いただき、ご意見ご感想をお聞かせください。

●藤本 高志

経済史とはあまり関係がないかもしれませんが、取り組んでいる研究を紹介します。

一つは、日本の食料自給率に関する研究です。2000年度、日本の食料自給率は40%へと低下しました。これは、先進国の中では最低水準です。BSEなど最近の食関連事件も相まって、日本の市民は食料の自給と安全性の改善の必要性を感じるようになりました。このような中で、地域で生産し地域で消費しようという「地産地消」の表現がマスメディアで使われることが増えました。そこで、①地域で生産された食料がどの程度地域で消費されているかの指標としての地域食料自給率を計測する研究を行っています。また、日本の食料自給率が低下した重要な要因に食生活の変化があります。米の消費が減少し、畜産物の消費が増加してきたのです。畜産物の飼料がほとんど輸入であるため、自給率が低下してきたのです。このような中で、最近注目されているのが、日本の風土に適した稲を家畜の飼料とする試みです。そこで、②飼料用稲を基軸とする耕畜連携システムの確立が自給率、農村経済、環境に及ぼす影響を評価する研究を行っています。

二つは、里山の保全に関する研究です。かつての里山林は、キノコや木の実、肥料や飼料となる草、燃料となる薪を採取する場でした。村落共同体の構成員が平等に利用する入会地として、共同利用されてきました。里山林は、このように利用されることで生物多様性を増しました。しかし、農業活動や生活の近代化に伴い、森林に依存することがなくなった現代、里山林は放棄され、鬱蒼とした草木に覆われ、人間のアクセスを拒むようになり、生物多様性も低下しつつあります。しかし、緑に対する国民の関心が高まる中で、人々が里山へのアクセス権を得ると同時に、林道や歩道を整備すれば、里山林は住民のリクリエーションの場として新たな価値を持ちます。そこで、京都府南部地域の全ての里山林班を対象に、GISを活用し、リクリエーションを目的とする整備・保全がもたらす潜在的便益を評価する研究

を行っています。全ての林班の潜在的便益を地図に落とせば、どの里山林を保全すべきかの政策決定を支援することができます。

●土井 乙平（2004 年 4 月から所員）

日本料理の店舗経営を含む広義の伝統産業を研究対象にして、その発展の方向を探る調査研究をしています。この研究を始める時点で家族形態との関連で伝統産業を見ていくべきだろうと考えたが、その予測のとおり、家内工業的に小規模生産形態をとって、道具と高度技能によって高品質商品を生産販売する伝統産業が、高度に発展した商品生産社会で生き延びていくためには、職住分離と核家族化が、障害となることが確認できつつある。伝統の伝達と継承は日常生活文化を基盤にして行われるので、職住分離は伝統的技法を伝統的技術に矮小化し、核家族化は日常生活文化の中での伝統継承を不可能にする。

このことを、調査で確認しながら、研究を進めてきたし、今後もこの方向で研究をしていくつもりです。したがって、今後は、日本的伝統、日本的家族、日本の日常生活文化とは何かを問い続けながら、日本文化論の研究を進めていく中で、日本の伝統産業の発展の方向を探ることになる。

伝統は固定的ではなく、時代の変化に対応して生き残ってきたものであり、特定の国と時代に固有のものである。制度も歴史的形成体であって、特定の国の特定の時代に固有のものである。このことを示しながら、現代の日本の制度や伝統を考えていきたい。

●滝内 大三（2004 年 4 月から所員）

学部づくりの仕事に翻弄され、今また大学院研究科を立ち上げる仕事に従事している関係で、研究者の生活をすっかり諦めていたところ、徳永所長から研究所員のお誘いをいただいた。もとより日本経済史や経世済民史は門外漢であるが、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのイギリス女性のキャリア形成に関心があり、「女性」、「教育」、「労働」をキーワードにした研究機会が与えられるならありがたいと思い、参加させていただくことにした。現在はイギリス女性向けの就職ガイドブックの分析を始めたところである。ただブランクが長く、さび付いた頭でどれだけのことができるか、はなはだ心もとない。

●黒木 賢一（2004 年 4 月から所員）

私の専門は臨床心理学です。臨床心理学は主に欧米を中心として発達してきた学問ですが、日本で心理臨床をしていると欧米中心の理論や実感がそぐわない場合があり、自分化に根ざした「心理臨床とは何か」を模索するようになりました。その結果として、東洋の「気」という概念に辿り着いたのです。東洋を背景とした日本語文化の中で、気の問題を無視することはできません。気には心理的力動、身体感覚、人間関係の機微、自然との関わりがクロスオーバーされているからです。このような気の問題をいかに心理臨床に取り入れ、理論化し、実践に役立たせるかが私の研究テーマです。

今年 10 月には、学会誌『心理臨床学研究』に「心理臨床における心身一如の視座」という論文が掲載されますし、また 12 月には人体科学会第 14 回大会で「心理臨床における気の働き」について発表する予定です。これらの研究の位置するところは、西洋近代の二元論を超え、新たな心理臨床を構築するという大きな課題にチャレンジすることなのです。

●徳永 光俊

最近読んだ本で、勉強になったのは、住谷一彦氏のものです。最近著『日本を顧みて』（2004）は、大塚久雄門下のマルクス、ウェーバー研究、日独民族学研究者の回想録です。『日本の意識』（1982）は、20 年前に読んだのですが、すっかり忘れていました。

私が目を開かれたのは、原田敏明の宮座論に依りながら、日本社会の伝統的な労働エートスを解明しているところです。日本の共同体は聖俗両面を持っており、地縁的な宮座は、一村一氏神の常在神の高神信仰（偶像拒否の無像性）を核として構成されている。その聖地に住む村人の生業が農業の場合、農業にいそむことは同時に神祭りの仕事であって、「祈り、

かつ、働け」という労働エートスを生み出すことになる」と指摘しています。

カネ儲けのために働いていたのではないのです。ここに、日本列島になぜ農業・農村が必要なのかの答えがあると思います。日本民族の鍾としての農業・農村。

もう一冊、面白かったのは、農民作家山下惣一が、50年の農業人生を振り返り遺書のつもりで書いた『農から見た日本』(2004)です。戦後の近代化農業論の誤りは、①その土地で暮らしていくための一つの手段に過ぎない農業を、政策によって目的化したこと。②農業内部の循環構造を破壊して単作・連作に変えてしまい、③経済成長を強制して、過剰な投資を行わせ、市場原理一辺倒にさせたこと、の3つであると指摘しています。

農業現場からの50年の経験をもとにした発言には、説得力があります。今もって上の誤りを反省もなく繰り返している学者、官僚、マスコミ連中をあざ笑っています。

私は50歳になってからこの数年、何のために研究をやるのか、悩んできました。いくら研究しても、日本農業・農村は衰退していくばかりです。食糧自給率40%、穀物自給率28%、こんな国は世界でも稀です。まだまだ下がります。じゃあ、あなたが農業やれば・・・運動すれば・・・有機・無農薬農業、環境保全・持続型農業・・・、同じ過ちの繰り返し。

最近「農業は農業である一心土不二の時代」という短文を書きました。愚直に言い続けるしかないのだと、覚悟を決めました。

7. 施設

所在場所	G館1階・地下室
使用室名	所長室、共同研究室、古文書室、 事務室、書庫(地下室)
使用面積	197.76m ²
所長室	(19.76m ²)
共同研究室	(39.66m ²)
古文書室	(30.28m ²)
事務室	(108.06m ²)



8. 2004年度の事業予定

研究活動

■**経済史研究会** (4・6・10・12月の第1土曜日開催。場所はいずれも大阪経済大学)

- | | | |
|------|--------------------------------|--------|
| 第36回 | 2004年4月3日 | 出席者40名 |
| 報告 | 京都大学人文科学研究所教授 山本 有造氏 | |
| | 「私の『満洲国』経済史研究」 | |
| 第37回 | 2004年6月5日 | 出席者12名 |
| 報告 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授 服部 民夫氏 | |
| | 「東アジアの工業化パターンと経済関係—技術蓄積論からの接近」 | |
| 第38回 | 2004年10月2日 | |
| 講演 | 東京経済大学経営学部教授 石井 寛治氏 | |
| | テーマ未定 | |

■**日本経世済民史研究会** (開催場所はいずれも大阪経済大学)

- | | | |
|-----|-----------------|--------|
| 第4回 | 2004年5月22日 | 出席者22名 |
| 報告 | 大阪経済大学元学長 鈴木 亨氏 | |
| | 「西田哲学と経済」 | |

第5回 2004年7月3日 出席者 22名
報告 愛媛大学教育学部教授 松野尾 裕 氏
『京都経済学』と戸田海市・黒正巖

■経世済民研究会

第1回 2004年5月21日 於：日本経済史研究所共同研究室 出席者 8名
報告 経済学部教授 土井 乙平 氏
「日本料理と伝統継承—家族形態から見る日常生活文化の伝達と継承」
第2回 2004年6月18日 於：日本経済史研究所共同研究室 出席者 11名
報告 人間科学部助教授 黒木 賢一 氏
「気の文化と心理臨床」

■第2回春季歴史講演会（於：70周年記念館フレアホール）

2004年5月15日 講師：吉村 昭 氏 出席者 480名
「歴史小説における史実—生麦事件とその歴史的意義—」

■第6回 寺子屋 史料が語る経済史（於：D館16教室）

2004年7月17日 師匠：大阪経済大学人間科学部教授 家近 良樹 氏
「最後の将軍徳川慶喜と京都・大坂」 出席者 256名
2004年7月24日 師匠：松山大学経済学部教授 川東 暉弘 氏
「日記に見る20世紀の地域経済史」 出席者 167名
2004年7月31日 師匠：東京経済大学経済学部教授 堺 憲一 氏
「経済小説で読み解く戦後経済史」 出席者 187名

■第2回秋季学術講演会（於：C館ホール）

2004年11月13日 講師：慶應義塾大学名誉教授 速水 融 氏
テーマ：「経済史と人口」
2004年11月20日 講師：京都大学名誉教授 上田 閑照 氏
テーマ：「人間とは何か」
—『経世済民』の基礎に向けて—
2004年11月27日 講師：三洋電機代表取締役会長 井植 敏 氏
テーマ：未定

出 版 活 動

◇『経済史文献解題』2003年版（思文閣出版）	2004年9月刊行予定
◇『経済史研究』第9号	2005年3月刊行予定
◇所蔵古文書目録 第5集	2005年3月刊行予定
◇『日本経済史第10文献』	2005年3月刊行予定

展 示 活 動

◇ 黒正巖遺墨・遺品展（於：A館ギャラリー）	2004年11月7日～29日 (予定)
------------------------	------------------------